但馬國城崎温泉

ルハ、温室ニ幕打テ、其人獨浴シ、外人ハ皆揚テ不入、幕代銀子一枚也、爰ニテ留湯ト云ガ如シ、主治、中風折傷、打身、疝氣、脚氣、痞積、疥癬、小瘡類、楊梅瘡、癩風、

〔玉勝間八〕但馬國の城の崎のいでゆ

增鏡に、安嘉門院、丹後のあまのはし立御覽じにとておはします、それより但馬のきのさきのいで湯めしにくだらせ給ふとあり、此温泉そのほどより名高かりけむ、

〔湯島温泉記〕湯島　城崎郡湯島なり、昔は島にて有といひ傳ふ、今此邊新田多し、南より北へ流る川の端に船著場有、町は少西へ引退きてあり、町中に西より東へながるゝ小川有り、此川上は、竹野といふ所の嶺の麓より落ると也、湯壺も町の家々も、皆此川を狹みて兩方にあり、此川末にては落あひて、津井山田井村の間より北海へ落る也、此川筋、昔ば海にて有しにや、觀音浦、笹の浦、むすぶの浦、二見の浦などいふ所、皆此川上なり、〇中略

新湯　一の湯二の湯と分て二つ有、是下の町の入口にある湯なり、湯熱くして湯の勢つよし、隔日にして、今日は一の湯をとめ湯にして二の湯を入こみにし、又明日は二の湯をとめ湯にして一の湯を入こみとす、　切に幕は仕舞て、夜は一の湯二の湯男女をわけて入こみとす、爰の湯は有馬のごとく湯壺の底より沸にあらず、一の湯のわきに湯口といひて、岩の下より沸出る也、それをとひを仕かけて、一の湯二の湯へとるなり、此湯口のゆを汲取て、所の者の朝夕つかふ湯とす、湯は甚あつくきれいなり、されど鹽はゆき故に、飲食には用ひがたし、近年爰の湯をもてはやす事、京都の醫師後藤左一郎、此湯の諸病に効有事を考て說廣めしゆへに、畿内より初めて諸國に聞傳へて、入湯の者多し、後藤氏が說にも此新湯を第一に稱して、此湯は氣血をめぐらし、運動して鬱滯を解の功あるゆへに、諸病に効ありと云々、又日によりて湯のあつき時は、外より川の水を汲て、といにて仕かけてぬるくし、又ぬるき時は、湯口の蓋をぬきて、湯をゑかけて熱くする